The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フェミニズム臨床哲学とクリエイティヴ・ライティング
Author(s)	ほんま, なほ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 181-195
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【臨床哲学の書きもの】

フェミニズム臨床哲学とクリエイティヴ・ライティング[1]

ほんま　なほ

要旨

鷲田清一の提唱する臨床哲学は、聴くことの力を重視し、〈臨床〉を、ある他者の前に身を置くことによって他者を迎え入れ、注意ぶかく他者のことばを受けとり、じぶん自身もまた変えられる経験である、と考えた。しかし、わたしたちが実践する対話の経験が教えてくれたのは、聴くことは単数ではなく、聴く・語るが交代する複数での共同の行い、聴きあいと語りあいのもつ意味と豊かさである。聴くこと、待つことの受動性からは、ひとびとが声をだし、語る主体となる変容は生まれない。異なる声でともに語り、ともにかんがえ、ともに変わる実践としてのフェミニズムは、見えないものから見えるのものへ、沈黙から声へ、客体から語る主体へ、と変容することを重視してきた。ここに、苦しみの受動性に耽溺するのではなく、状況をともに生き延びる友（philia, friendship）と知恵（sophia, wisdom）のつながり、つまり“philosophia”が生まれる。オードリー・ロードやアドリエンヌ・リッチは、人種、民族、階級、性、性別というさまざまなちがいを横断しつつ、詩を書き、うたうこと、つまり沈黙が声と行動に変わることを強調する。それまで声をあげられなかった、さまざまなひとびとが、表現行為に参加することで、世界の光景は変わっていく。フィロソフィは、対話の実践であるとともに、書く実践――さまざまな媒体を通して創造的に書く営みである。多様で創造的な表現行為へとひとびとを誘い、声と意味の探究をつづけていくことが、〈臨床〉とフェミニズムと哲学実践が交差する「フェミニズム臨床哲学」となる。

「聴くことの力」よ、さようなら

わたしは、ちいさなこどもたち、学校の教室でじっと座っているのがつらい生徒たち、異なる文化と民族のルーツをもちながら日本で生きてるひとたち、障害や病気をもちながら生きるひとたち、ほかのひととは異なるジェンダー・アイデンティや性的指向をもつひとたち、そしてもちろん、それ以外のひとたちと対話する毎日を送っています。わたしたちの対話では、聴くことだけに専念するひとはいません。〈聴く〉ことと〈話す〉ことはつねに対になって、ひとびとのあいだで、交換されていきます。聴くことも、話すことも、特別な技

[1] 本稿は、2019 年 10 月 19 日に台湾・政治大学にて開かれた第２回東アジア臨床哲学会議にて読み上げられた原稿である。なお、当日は英文のスライドをもちいて英語と日本語をまぜて発表が行われたため、再録にあたって引用部分は英語と日本語訳を併記している。

法や能力ではありません。だれもが、他のひとと並んで座り、からだを落ち着け、視線をそろえ、聴くことに加わり、声をかさねていきます。

聴くという行いは、透明で見えないものではありません。聴くことは、まなざすことでもあり、触れることでもあります。聴くひとがみんな下を見たまま、微動だにしなければ、わたしたちはなにかを話す気にはなれません。じぶんが聴いてもらえている、と話すひとが感じられ、じぶん自身がその場に包摂されているという体験が必要です。たとえば、たがいの名前を呼びあう、という単純におもわれるやりとりが、じぶんがそこにいる、そこにいても大丈夫だ、という場所への信頼感を醸成していきます。

わたしは、貧しい山形の農村でことばで生活を綴ることをこどもたちとともに学びつづけた無着成恭の、「自分の名前」という詩をはじめに読み上げ[2]、彼が書くのと同じように、自分の名前についての記憶やエピソードについて、思いつくまま自由に書いて、声をだして読んでみる、ということをしばしば行います。このような作業は、グループで話すことになれていないこどもたちや、つらい経験をなかなか話せないひとたちにとって必要であるだけでなく、あらゆるひとが経験すべきことでしょう。大人たちのなかには、その場で呼んでほしい名前を口にするのに躊躇するひともいます。わたしが経験した対話では、ある男性は「名前にはとくに意味がない」「どの名前で呼んでほしいか決められない」と、時間をかけた末に名前を決められませんでした。このようなちょっとしたことが、そのひとのそれまでの生き方やその場の感じ方を明瞭に語っています。ひとが語るとは、語を発するだけではなく、行為によって示していることでもあるのです。同じように、聴くとは、聴覚をもって聞くだけでなく、ひとが全身で表現していることを、やはりわたしたちの全身で、そのままに受けとることなのです。

臨床哲学を宣言する『「聴く」ことの力』において、鷲田清一は〈臨床〉を「ひとが特定のだれかとして他のだれかに遭う場面である」と書いています。[3]聴くという営みによって、ある個別の他者に向かい、一個の事例によって一般原則が揺さぶられる経験こそが、〈臨床〉と哲学とを結びつける、と。「考える」「論じる」「書く」という特権的なポジションから哲学を引きずりおとし、「聴く」「遭う」「揺さぶられる」「苦しむ」という受動的経験へと反転させ、哲学の享受してきた特権性をひとびとに分け与えること。たしかに、この訴えには、哲学を論じるうえで、ひとつの意義が認められるべきかもしれません。しかし、この反転には、書く、論じることの権威から、聴く、受容することへの権威へ、という別の意味がつきまといます。鷲田は、不幸のなだなかにいるひとは「自分の身に起こっていることを表現する言葉がない」というシモーヌ・ヴェイユのことばを引いたあとで、こう書いています。

> 苦しみを口にできないということ、表出できないということ。苦しみの語りは語りを求めるのではなく、語りを待つひとの、受動性の前ではじめて、漏れるようにこぼれ

[2] 無着成恭『詩の授業』太郎次郎社、1982.
[3] 鷲田清一『「聴く」ことの力』TBS ブリタニカ、1999, p.108.

落ちてくる。つぶやきとして、かろうじて。

『「聴く」ことの力』p.163.

ことばは、聴くひとの「祈り」そのものであるような耳を俟ってはじめて、ぼろりとこぼれ落ちるように生まれるのである。苦しみがそれをとおして現われ出てくるような《聴くことの力》、それは、聴くもののことばそのものというより、ことばの身ぶりのなかに、声のなかに、祈るような沈黙のなかに、おそらくはあるのだろう。その意味で、苦しみの「語り」というのは語るひとの行為であるとともに聴くひとの行為でもあるのだ。

『「聴く」ことの力』p.165.

この、ほとんど聖職者の行いのような、「聴く」ことの美しいイメージ。しかし、そうなのでしょうか？ ほんとうに、ことばは「語りを待つひとの、受動性の前ではじめて、漏れるようにこぼれ落ちてくる」のでしょうか。わたしはこれまでの対話の経験のなかで、このような受動性の前で、ことばがこぼれ落ちてくるという場面に出会ったことがありません。むしろ、ことばは、聴くことの受動性ではなく、ことばにならないものとの葛藤のなかで、考えることは、考えることの困難さのなかで、名前は、名づけるのがむずかしいことに名を与えるなかで、を生まれるのではないでしょうか。アドリエンヌ・リッチはこう書いています。

ことばは力である。そして、シモーヌ・ヴェイユが言うように、不正に最も苦しめられている人びとは、その苦しみをことばに表現することがいちばんできない人びとだ。そして、その声なき多数者は、もしことばへと解放されたならば、彼ら彼女らをあざむいてきた諸条件がそのまま永続するのを、けっしてだまって見てはいないだろう。こうした考えは、ことばへの解放とは何を意味するのかについてのある特別な構想、つまり、ことばへの解放とは、たんにエリートの専門用語を習得し、現状に申し分なく適応するということではなくて、ことばは現実を変革する手段として使えるということを学ぶことなのだ、という構想にもとづいている。教えることに私が興味をひかれるのは、たまさかの天才の出現のためであるよりも、ことばをもたなかったひとびと、ことばをもてないほどに利用され虐待されてきたひとびとによる、全面的なことばの発見のためなのである。

リッチ『嘘、秘密、沈黙。』pp.111-112.（訳語を一部変更）[4]

.. that language is power,　and that, as Simone Weil says, those who suffer from injustice most are the least able to articulate their suffering; and that the silent majority, if released into language, would not be content with a perpetuation of the conditions which have betrayed them.

[4] アドリエンヌ・リッチ『嘘、秘密、沈黙。』大島かおり訳、晶文社、1989 年.

> But this notion hangs on a special conception of what it means to be released into language: not simply learning the jargon of an elite, fitting unexceptionably into the status quo, but learning that language can be used as a means of changing reality. What interests me in teaching is less the emergence of the occasional genius than the overall finding of language by those who did not have it and by those who have been used and abused to the extent that they lacked it.
>
> Rich, On Lies, Secrets, and Silence, pp.67-68.[5]

ことばとは、受動的な傾聴によって奇跡のようにこぼれ落ちるのではなく、学ぶこと、じぶんを変えるという努力によって成し遂げられるものではないでしょうか。しかしそれは、たったひとりでは成し遂げられません。わたしたちがことばを学ぶのは、だれかが目の前でことばと格闘し、もがくさまを目の当たりにするときです。ともに語り、ともに書く、ともに聴くという、聴くことと語ることが一体となった行為のなかで。祈りとは、沈黙のなかにではなく、まさにいま生まれでようとすることばのなかに、ことばとともに生じます。苦しみとは、それが語られるのを聴くことではなく、注意によって〈見えるもの〉となるのです。対話とは、苦しみを見えるもの、聴こえるもの、触れられるものにすることなのです。

ひとつの物語をいくつもの声で

わたしがある語りあいの場に参加したときの経験をお話ししましょう。わたしは、学生の研修の引率者としてある大学を訪問したとき、偶然が重なって、そこで開かれていたトランスジェンダー（出生時に割り当てられた性別（gender assigned at birth）とは異なる性別で生きるひとたち）の学生が集まって語りあう会に参加する機会がありました。わたし自身も長いあいだ、じぶんに割り当てられた性別に違和をもっていましたが、じつはそれまで、そのような集まりに参加したことがなく、じぶんの経験についてひとに話すということもほとんどしていませんでした。この場でわたし自身が経験した聴く、語るということについて、わたしは「エピソード・ライティング」という手法で書いたことがあります。以下はそこからの引用です。

> 会がはじまってしばらくたって、家族のことが話題にあがった。多様な性・性別を生きるひとたちが家族にじぶんのあるがままの姿を打ち明けるのが容易なことではないことは、わたしもよく知っていた。参加者それぞれがポツリポツリと家族への関係について話しはじめる。何人かが話したあと、わたしの隣に座っていた学生が、女性として生きようとするじぶんを父親が家族の一員として認めてくれず、家のなかでもまるで他人どうしのようにふるまい、長いあいだ父親との確執が続いていたのだが、あることを

[5] Adrienne Rich, *On Lies, Secrets, and Silence: Selected Prose 1966-1978*, W. W. Norton & Company, 1979.

きっかけにその父親から、女性になりたいという想いを理解するのは難しいけれど、誰がなんと言おうとお前はわたしの娘だと伝えられ、じぶんが父親に理解を求めていたことに気づき、長い確執がとけてうれしかった、と話した。わたしは参加している学生たちの親の世代にあたり、生きてきた時代や状況もかなり異なっているので、じぶんの経験がこの場で語るに値するのかかなり迷いながら話を聴いていた。そして、わたしはわたしの父親への想いを誰にも話したことがなく、そのことはわたしの胸のなかに深くしまいこまれていた。しかし、家族への想いを語る学生たちの声を聴き、さらに先の学生の話に強くつき動かされ、どうしても話したいというきもちが湧きあがってきた。もうわたしはそれを抑えきれなくなった。発言するときにはボールをパスしてもらうことになっていたので、わたしはためらわず手をあげてボールを受けとり、次のような内容を話しはじめた。

わたしの父は２年前に亡くなりました。父は大正生まれで、じぶんの性や性別についての悩みを家族に話すということはわたしにとって考えられないことでした。わたしのこと（性的指向や性自認について）は一生話さないと心に決めていたんです。でも、父が臨終を迎えるとき、病院のベッドに横たわり死にゆく父の姿をまえに、わたしは、これで父にとっての「息子」としての役目はおわった、とおもうと同時に、わたしはあなたの娘ですよ、と心のなかで叫んでいました。わたしはじぶんのことを父に話して聴いてもらうことはなかった…だけど、そうやってお父さんと関係を結べたことは、ほんとうによかったとおもいます。[6]

一生だれにも話すまいと胸にしまっていたことを、わたしがその場で話したことにじぶん自身でもたいへん驚きました。わたしたひとりで語ったのではなく、ともに聴き、ともに見、ともに語ったのです。

おなじ病や障害、または、おなじような困難の経験についての語りには、ひとつの物語――さきの例では、家族への思いゆえに引き受けざるをえない葛藤など――を異なる声で語り継いでいく、という特徴がみいだされます。もちろん、ひとりひとりの経験は異なるものですから、おなじ経験を語っているわけではありません。また、外部の視点から発見されるような、ある種の経験を語るパターンのようなものが語りのあいだに生じているのでもありません。そうではなく、ある困難な状況について語りあうなかで、語り手たちが選び取る態度や姿勢について重なる〈何か〉がその場で浮かび上がり、それを語り手たちが引き継ぎながら語ることで、〈ひとつの物語をさまざまな声で語る〉というある特別な経験が生まれるのです。この〈何か〉は、けっして対象化されることなく、語られる内容と語り手の様子の両方に現れ、消えていくのです。この、ひとつの物語をさまざまな声で語るということ

[6] ほんま なほ「語る主体になる：語りあいの活動と対話の経験を書くことについて」臨床哲学研究室編『臨床哲学』19 号、2018, pp.103-4.

は、心理学や社会学などの調査を通して、研究者が病や障害、そのほかの苦しみの経験について描き出すような、共通の問題や構造とも質的研究と呼ばれるものとも性質の異なるものでしょう。なぜなら、そうした物語は、口承文学と同じように、語りあうひとたちが状況を生き延びるための支えとなり、他の声がその物語を生き、語るのを聴き、じぶんもその物語を、その場で、あるいは別の場所で、じぶんなりに語り継げることそのものに、意味があるからです。

対話においては聴くという行いが、誰かのものとして特権化されてはなりません。聴く主体がつねに複数であり、複数の主体とつながることがたいせつです。なぜなら、わたしたちの語りは、たったひとりの口から紡ぎ出されたものであったとしても、そこに複数の声がまざりあっているからです。

> 私のこれはあなたと彼女とそのまた彼女のおかげ、その彼女のそれはそのまた彼女とそのまた彼女とそのまた彼女のおかげ……。この文句は、物語を話しだすまえに彼女がよく歌っていた歌の、出だしの文句だ。私は、私の源（複数の場合もある）を記憶し、受け入れ、名づける。私の声を、権威者の声を通して権威づけるためではなく、（なぜなら私たち女は、大文字の《文学史》のなかで権威をもつことなどなく、賢い女も権威から権力を与えられたことなどなかったから）、そうではなくて彼女を呼び起こし、歌うため。女と言葉のあいだの絆。女たちのあいだの絆。十分な効果をあげるには、言葉はリズミカルに、韻律にのっとって、韻律を逸れて、歌わなければいけない。
>
> トリン・T・ミンハ『女性・ネイティヴ・他者』pp.195-196.[7]

> I owe that to you, her and her, she owes I to her, her and her. I memorize, recognize, and name my source(s), not to validate my voice through the voice of an authority (for we, women, have little authority in the History of Literature, and wise women never draw their powers from authority), but to evoke her and sing. The bond between women and word. Among women themselves. To produce their full effect, words must, indeed, be chanted rhythmically, in cadences, off cadences.
>
> Trinh T. Minh-ha, Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism, p.122.[8]

ミンハのことばが示していることは、儀礼的な口承文化の意義だけではありません。曽祖母、祖母、母…という世代間の口承のみならず、水平的な声のつむぎあいにも同様の絆が生じます。病や障害、そのほかの困難を語りあう場所では、ひとりでは語ることのできない経験が、他者のことばに助けられながら語られていきます。言い表しがたい経験、ひとに話しても理

---

[7] トリン・T・ミンハ『女性・ネイティヴ・他者：ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳、岩波書店、2011.

[8] Trinh T. Minh-ha, *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*, Indiana University Press, 1989, p.122.

解してもらえない、言う価値のない経験、ことばにすること自体がつらい体験、そのようにして封じ決められていた何かが、ほかのひとの口から語りだされることばによって光があてられることによって、動きだし、ほかのひとの語る勇気に押されて、じぶんの口から溢れでていきます。「私のこれはあなたと彼女とそのまた彼女のおかげ、その彼女のそれはそのまた彼女とそのまた彼女とそのまた彼女のおかげ……」　　この歌は、おなじ状況を生き、生き延びるひとたちの、語りあいの意味と主体どうしの絆を見事に表現しています。わたしたちは、ここから知識と知恵のちがいを学びとるべきではないでしょうか。

表現する知恵

熟練した臨床医は、ある患者の語りを聴きながら、かつて対話した患者たちの話をもとに、こんなひとがこう言った、とバーチャルな対話を演じてみせることができます。臨床医を通して、その背後にいるさまざまな仲間と対話することができるのです。たしかに、専門知識によって患者の話に意味を与えるよりも、他のさまざまな患者が悩み生きている様子を伝えるほうが、患者に生きる勇気を分け与えます。それは臨床家としてできることのひとつでしょう。しかし、どのような熟練も肉声を、つまり他の生きる主体を与えることはできません。「女と言葉のあいだの絆。女たちのあいだの絆。」とミンハが書くように、生きる主体とことばの絆、生きる主体たちのあいだの絆というものがあり、この声のネットワークのなかでこそ紡ぎつづけられる表現というものがあります。

友であること（friendship）と知恵（wisdom）とがであうことばである「フィロソフィ」を知識の学から隔てる、知識と知恵のちがいはなんでしょうか？　知識とはもっぱら、対象についての知識であり、定義や分類によって整理され、データーベースとして時間や場所を超えて使用されるものです。それに対して、知恵とはひとびとの表現のなかに現れ、生きているものであり、また、行為することと区別できないものではないでしょうか。言いかえれば、知恵はつねに肉声で語られる、パフォーマティヴなできごとである、ということになります。この表現することと肉声の関係をもっともはっきり示しているのは詩を書き、詠むことです。「黒人の、レズビアンの、戦士たる詩人」、オードリー・ロードの詩を引用します。

And when the sun rises we are afraid
it might not remain
when the sun sets we are afraid
it might not rise in the morning
when our stomachs are full we are afraid
of indigestion
when our stomachs are empty we are afraid
we may never eat again

when we are loved we are afraid
love will vanish
when we are alone we are afraid
love will never return
and when we speak we are afraid
our words will not be heard
nor welcomed
but when we are silent
we are still afraid
So it is better to speak
remembering
we were never meant to survive.

太陽が昇るとき わたしたちはおそれる
太陽が昇りつづけないことを
太陽が沈むとき わたしたちはおそれる
もう朝に太陽が昇らないことを
お腹がいっぱいのとき わたしたちはおそれる
よく消化できないことを
お腹がすいたとき わたしたちはおそれる
もうにどとたべられないのかと
わたしたちが愛するとき わたしたちはおそれる
愛が消え去ることを
ひとりぼっちのとき わたしたちはおそれる
愛がにどともどらないことを
そして 話すとき わたしたちはおそれる
じぶんたちのことばが聞かれることもなく
歓迎もされないことを
でも わたしたちが黙ってると
わたしたちは ずっと おそれたまま
だから 話したほうがいい
おもいだして
わたしたちは生きのびなくてよいと
されているのを

from Audre Lorde, A Litany for Survival[9]

[9] Audre Lorde, A Litany for Survival, in Your Silence Will Not Protect You, Silver

「連禱」と名づけられたこの詩は声にだして読まれることで、話すことをおそれるひとたちに触れ、語りかけ、目覚めさせます。プロパガンダとも説教とも異なり、わたしたちの恐れと不安を否定せず、しかし、「わたしたちは生き延びなくてよい」とされる現実に目を向け、なすべきことをせよ、とこの詩は、わたしたちが生き延びるための知恵をそのまま教えています。ベル・フックスはこの詩を引きながら、「話すことは、じぶんを変容させることに積極的に関わることであるとともに、客体から主体へと動くという儀式でもある。主体としてはじめてわたしたちは語ることができ、客体としては、声を奪われたまま、他者に規定され、解釈される存在、である。」と書いています。[10]他者に規定される客体から語る主体へと変わることは容易ではありません。ロードがいうように、「沈黙をことばと行動に変えることは、自己開示の行為であり、危険がともなうのが常」[11]だからです。しかし、この命がけの変容の鍵となるのは、触れられ、見られ、聴かれ、感じられるわたしたちの身体です。この感じられる身体は、受動として作用を被る客体ではなく、自身を表現する身体でもあります。乳がんを患い、沈黙に圧倒された日々について語りながら、ロードはこう書いています。

> 沈黙のせいで、わたしたちのだれもが、自身の恐れを顔に表現しています。侮蔑され、検閲をうけ、なんらかの判断をくだされることの恐れ、または、認識され、攻撃を受け、絶滅させられる恐れを。しかし、おもうに、なによりわたしたちが恐れるのは、わたしたちがそれなしには真実に生きることのできないはずの、見えるものであること visibility なのです。人種のちがいが たえず 見ることを歪めているこの国では、黒人の女は とかく 見られるものでありつづける一方で、人種差別によって人格をはぎとられて、見えないものにされてきました。女たちの運動のなかであってさえ、わたしたちはまさに、わたしたちのよわみをだらけだす vulnerable　この見えるすがた、わたしたちが黒人であることを めぐって、戦わなければなかったし、いまもそうです。
> …しかし、わたしたちがすがたを見せ、いちばんのよわみをさらしだすことは、わたしたちにとって、もっとも大きなちからの源でもあるのです。
>
> In the cause of silence, each of us draws the face of her own fear - fear of contempt, of censure, or some judgment, or recognition, of challenge, of annihilation. But most of all, I think, we fear the visibility without which we cannot truly live. Within this country where racial difference creates a constant, if unspoken, distortion of vision, Black women have on one hand always been highly visible, and so, on the other hand, have been rendered invisible through the depersonalisation of

Press, 2017, pp.200-201.

[10] bell hooks, talking back: thinking feminist, thinking black, Routledge, 2015, p.12.

[11] Lorde, The Transformation of Silence into Language and Action, in *Your Silence Will Not Protect You*, Silver Press, 2017, p.3

> racism. Even within the women's movement, we have had to fight, and still do, for that very visibility which also renders us most vulnerable, our Blackness. …visibility which makes us most vulnerable is that which also is the source of our greatest strength.
>
> Audre Lorde, The Transformation of Silence into Language and Action[12]

黒人であること、女であること、クィアであること、死に怯えるがん患者であること…こうした「見えるものであること visibility」こそがつよさとなるのは、なぜでしょうか？ 黒人の女であることは、見えるものとして標的にされ、見えないものとして存在がかき消されている、という二重の状態に引き裂かれ、力を奪われています。同じように、レズビアンであることは、ポルノグラフィの対象として見られるものであると同時に、わたしたちのすぐとなりで日常を生きている存在としては、見えないものにされています。この〈見えるすがた〉をみずから引き受け、ことばと行為によって表現することが、なぜ、ちからとなるのでしょうか。それは、ちからが、無から生じるのでもなく、天から権限を付与されるのでもなく、身体をもってただそこにあること、存在それ自身の重みと弱さ、在ることの労苦の輝きを引き受け、学び教えることから生まれるのではないでしょうか。わたしたちの真実は、ことばによって描写されるのではありません。表現することばの真実というものがあるのです。

> わたしたちのような書くひとにとって必要なのは、わたしたちがなにについて書くのかについての真実だけでなく、わたしたちがそれをについてはなすための、ことばについての真実を見極めることのなのです。それは、あるひとたちにとっては、わたしたちに意味のある語を共有し、ひろげていくことでもある。しかし、わたしたちすべてにとってなによりも必要なのは、わたしたちが理解をこえて信じ知る真実を生き、話すことによって、教えることなのです。なぜなら、このようにしてのみ、わたしたちは生き延びることができるから。創造的で永続する、成長であるところの生命と生活のプロセスに加わることによって。

> For those of us who write, it is necessary to scrutinise not only the truth of what we speak, but the truth of that language by which we speak it. For others, it is to share and spread also those words that are meaningful to us. But primarily for us all, it is necessary to teach by living and speaking those truths which we believe and know beyond understanding. Because in this way alone we can survive, by taking part in a process of life that is creative and continuing, that is growth.
>
> Audre Lorde, The Transformation of Silence into Language and Action[13]

ここでロードは、困難な経験をことばによって正確に描写し、記述し、それが伝播すること

[12] ibid. pp.3-4.
[13] ibid. pp.4-5

と、ことばで表現することによってはじめてわたしたちが生きることの真実を、はっきり区別しています。話すことと生きることがひとつになる、そのとき、ことばの真実が宿ります。ここでもまた、わたしたちは知識と知恵のちがいをふたたび発見することができます。語る、書く、表現するとは、生命と生活のプロセスの一部をなすこと、生命と表現を一致させる創造の行為なのです。

行動する詩

「ことばをうまく使いこなすこと」「明晰に書くこと」「規範的な文体を使うこと」「相手を説得するためにディスコースに秩序を与えること」――これらは西洋哲学のなかで支配的な規範となってきました。しかし、ミンハはこのように上から押しつけられた言語に抗して、次のように書いています。

> ［正しく、明晰に］書くことは、伝達し、表現し、監視し、押しつけ、導き、回復させ、助けること――いずれにしても、意味し、曖昧性のないメッセージを送り出すことなのだ。こうして思考の単なる道具になり下がってしまった書き言葉は、何かの目的に寄与するために、あるいは行動の補助として、使われるが、それ自身はけっして行動とはならない。
>
> トリン・T・ミンハ『女性・ネイティヴ・他者』p.26

> To write is to communicate, express, witness, impose, instruct, redeem, or save — at any rate to mean and to send out an unambiguous message. Writing thus reduced to a mere vehicle of thought may be used to orient toward a goal or to sustain an act, but it does not constitute an act in itself.
>
> Trinh T. Minh-ha, Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism, p.16.

考えることと行動がつながるためのことばとは、どのようなものでしょうか。ロードは、明白さ、表層ではなく、わたしたちが抱えこんでいる秘められた「暗さ darkness」のなかにこそ、創造性と力、そして〈感じる〉ことの源となる「可能性の場」が生き、成長しつづけているのだ、といいます。概念によって問題を解決するのではなく、わたしたちが日々経験することの内側で、感じるちからを育み、それが真の知恵と行動の源泉となることを、わたしたちはみずから学ぶことができるのです。

> ならば、女たちにとって、詩はぜいたく品じゃない。それはわたしたちが生きるうえで必要不可欠なものだ。詩がもたらす光の性質のおかげで、わたしたちは生き延びること、変わることへのじぶんたちの希望や夢を予言する。それらは、まずことばになり、そして考えになり、さらにふれあうことのできる行動となる。詩とは、名前のないものに名前をあたえ、考えられるようになるための道なのだ。

わたしたちの希望と恐れは、詩の小石で地平の彼方まで敷きつめられ、わたしたちの日々の生活である経験の岩によって刻まれている。
わたしたちが感じていることを、わたしたち自身が気づき、受け入れられるようになるにつれ、感じることをありのままに探求することは、もっともラディカルで大胆な考えをうみだす聖なる土壌となる。それは変わるために必要となるちがいをうみ、意味にみちた行動をはらむための安らかな住まいとなる。…

For women, then, poetry is not a luxury. It is a vital necessity of our existence. It forms the quality of the light within which we predicate our hopes and dreams towards survival and change, first made into language, then into idea, then into more tangible action. Poetry is the way we help give name to the nameless so it can be thought. The farthest horizons of our hopes and fears are cobbled by our poems, carved from the rock experiences of our daily lives.
As they become known to and accepted by u, our feelings, and the honest explorations of them become sanctuaries and spawning grounds for the most radical and daring of ideas. They become a safe-house for that difference so necessary to change and the conceptualisation of any meaningful action.

Audre Lorde, Poetry Is Not a Luxury[14]

詩ということばによって、名前のないものに名があたえられ、考えのがむずかしいことが考えられるようになり、行動を産む。この行動とは、比喩ではありません。語られなかったことを語ること、書かれなかったことを書くことは、それ自体として行動することのはじまりです。ロード、そしてリッチ、フックスらが実践するフェミニズム教育学では、経験をことばにし、詩を書き、色をぬり、装飾をくわえ、声にするという、クリエイティヴ・ライティングがとりわけ重要な意味をもっています。それまで声をもつことに気づくことができなかった、さまざまなひとびとが、表現行為に参加することで、世界の光景はその内側から変わっていくのです。

そのとき、学ぶことの意味も変わります。わたしたちは、支配的な文化に同一化することを止めなければなりません。偉大なテクストを正統に解釈したり、明晰な議論を展開したりすること、あるいはわたしたち経験を語らせ、傾聴し、それを正確に記述し、分析してみせることで、わたしたちの生活を支配し、従属させるのとは、まったくちがったしかたで、フィロソフィが、知恵の友、友の知恵として、わたしたちをみずから教える行動に導くことができるのです。テクストを好きかってに読んで創造的に書きかえるパロディにし、余白に落書きをし、議論を中断しておしゃべりをはじめ、他者の声に声を重ね、詩やうたをつくる。こうすることで、わたしたちすべてが書く、感じる、表現することを学び、生き延びるための表現を創作するための「安らかな住まい」にその場は生まれ変わるのです。

[14] ibid. p.8.

読む行為、もしくは書く行為の基礎としての信頼の問題全体が、私たちにようやくその扉をひらくようになったのは、文字文化に不信をいだくあらゆる理由のある人たちを教育する試みをはじめてからのことだった。生まれてはじめてまじめに書くことを試みる若い大人にとって、「だれを信頼できるか」という疑問こそ、ほんとうに書くという行為が起こりうるまえに超えねばならない根本的な境界線であるにちがいない。文字文化の一部になっている私たちがこういう疑問にぶつかるのは、自己決定のなんらかの辺境の地に立って書くときだけである。たとえば黒人知識人、あるいはごく最近では女性たちのように、文字文化の内部の被抑圧集団から出た書き手が、支配的文化と同一化することをやめて、自分自身を描き分析しはじめるときだけである。こうしたカテゴリーに入る者は、そうするよう促されるべきであり、書くこと読むことも――それ自体が自己の自然な活動の一つであるよりむしろ、非自己の一部であった、若い大人たちの経験のなかに入りこむべきなのだ。

リッチ『嘘、秘密、沈黙。』pp.106-107、訳語を一部変更[15]

The whole question of trust as a basis for the act of reading or writing has only opened up since we began trying to educate those who have every reason to mistrust literary culture. For young adults trying to write seriously for the first time in their lives, the question “Whom can I trust?" must be an underlying boundary to be crossed before real writing can occur. We who are part of literary culture come up against such a question only when we find ourselves writing on some frontier of self-determination, as when writers from an oppressed group within literary culture, such as black intellectuals, or, most recently, women, begin to describe and analyze themselves as they cease to identify with the dominant culture. Those who fall into this category ought to be able to draw on it in entering into the experience of the young adult for whom writing itself —as reading— has been part of the not-me rather than one of the natural activities of the self.

Rich, On Lies, Secrets, and Silence, p.64.[16]

フィロソフィは、対話の実践であるとともに、声にだして書く・描く実践、さまざまな媒体を通して創造的に書く営みでもある。表現するとは、感じることが源泉となって、見えるもの、響くもの、触れられるものになることです。多様で創造的な表現行為へとひとびとを誘い、声と意味の探究をつづけていくことが、〈臨床〉とフェミニズムと哲学実践が交差し、両者を変容させる「フェミニズム臨床哲学」となるのではないでしょうか。

---

15 リッチ前掲書
16 Rich, op. cit.

フェミニズム・臨床・哲学

そうはいっても、「臨床」「哲学」、いずれも、西洋の支配的言語によって組み立てられ、権威と排除によってひとびとを抑圧する側にあったことばです。「フェミニズム」すら、例外ではありません。西洋フェミニズム理論も、フェミニズム哲学も、有色の女性たち、LGBTのひとたち、移民や異なるルーツをもつひとたち、労働者階級に属するひとたちを差別、排除してきた悲しい歴史があります。ロードも、リッチも、フックスも、そのようなフェミニズムに対して常に声を発してきました。

knowledge of the oppressor
this is the oppressor's language
yet I need it to talk to you

抑圧者の知識
これが抑圧者のことば
でも、それが要るのだ、あなたと話すためには

Rich, The Burning of Paper Instead of Children

しかし、この発表では、リッチの詩が教えているように、そうしたことばに異なる意味をあたえ、異なる使い方をしてみせることで、フェミニズムと臨床と哲学を、ひとびとの生命と生活につなぎなおすことを試みました。

済州島に生まれ、日本で生き、日本語で書く李静和は、「慰安婦」のハルモニたちの語りを受ける〈まなざし〉について、いくつもの詩を織り交ぜながら思いをめぐらせる、まさに、クリエティヴ・ライティングにほかならない書物、「つぶやきの政治思想」において、次のように書いています。

> 言語化の結果セラピーになるという意味ではかつての日本の身の上話でも韓国の身世打令でも同じだが、こうした伝統的な行為がセラピーとどう違うかというと、セラピーにおいては自我分析が可能であり、自我を投影し、反省し、前後の状況を意識的に把握する。その結果、自分自身が浮かび上がる、浮かび出る、つまり明らかになる。それに対して韓国の身世打令みたいなものはすべてを語るのではなく、すべてのつながるひとつのことを反芻する。反省というより反芻。自己の批判的対象化というより、今まで生きてこられたと自分自身を慰める、あるいは今生きているよとほのめかす、ため息のようなもの。この場合、分析は行われない。想起すると同時に記憶をさらに深くからだにしみこませる。そこには、過去を懐かしむはたらきがつねに伴っている。今まで生きてこられたということを、自分のからだのなかで正当化する。

李静和『つぶやきの政治思想』[17]

「身世打令（신세타령）」とは、自身のつらい身の上話を歌と踊りで即興的に表現する韓国女性の伝統的な習慣です。語りを聴く、記述するのではなく、それをまなざすひとのまえで表現することで、表現するひとも、表現を受けとるひとも、「深くからだにしみこませる」。

> 第三世界の、つねに奪われ続けている人々の、特に言葉の表現の場を、あえて概念化しないこと。抑圧された側という見方自体、外部からの視線、まなざしになってしまう。内部に対話の形式はつねに存在していた。マダン劇、パンソリ、あるいは踊り……タルチュムみたいな形式がなかったわけではない。恨を解きだすという、溶かして、かたまりにして、また溶かして、という、そういう解きつづける感じの言葉を取り入れる形式。匂いや、空気や、あるいは非常に個別的なある種のかたまりみたいな生身の言語……そのようなものも言語として扱えるまなざし。[18]

求められているのは、沈黙し、傾聴する「耳」ではありません。生身から発せられることばを注意によって抱きとる、触れることとしてのまなざし。「臨床」や「生の記述」というものが、個人的で断片的なものとしてあらわれる生の有様を「普遍的視点」によって眺め、それを「普遍的言語」に置き換えることを意味するのであれば、わたしたちは「記述」という態度を放棄し、「臨床」と「哲学」いう権威的なことばの意味を根本的に変更しなければなりません。わたしたちが「創造的で永続する、成長であるところの生命と生活のプロセスに加わることによって、生き延びる」という意味へと。

> ひとの心に残った抑圧の塊、ああしたものをどう生きるエネルギーまで持っていくか。むずかしいことではあるけれど、そのようなことが、抑圧されたひとから逆に生まれてくるのではないか。ひょっとしたら、もうひとつの小道が見つかるかもしれない。境界に生きているひとが新しい可能性を提示することではない。そうした観点とつながるものではあるけれど、そういう理論的・観念的なレッヴェルではなくて、抑圧という心の傷、自分だけではなくて、さらに救われない魂たちを、逆に抱え込むことによって、本当の意味で共生、ともに生きることの可能性を設定する。
> 抱え込む、抱き込む、いだく、いだき込む、抱き取る……そういう問題だと思う。[19]
>
> （ほんま・なほ）

---

[17] 李静和『つぶやきの政治思想』青土社、1998.（なお、本書には頁数が記載されていない。）
[18] 同書
[19] 同書